

福井県内科医会学術講演会 令和3年9月4日(土)

特別講演 I 『高齢者心不全を診る ～再入院予防と漢方の役割～』

令和3年9月4日(土)開催の福井県内科医会学術講演会 特別講演 I を国立循環器病研究センター 心臓血管内科 医長 北井 豪先生にご講演頂きました。

わが国は世界に先駆けてかつてない超高齢社会を迎えていること、今後も高齢者人口は増加傾向が続き、2036年には3人に1人が高齢者となると予測されていることをお示し頂き、高齢化そのものや、高齢者に付随した高血圧や心疾患の存在により、今後は高齢者の心不全患者が増加し続け、2030年には130万人に達するとされ、「心不全パンデミック」とも表現されるほどの問題となっていることを御指摘頂きました。

また、本邦での心不全の臨床的特徴に対するレジストリ研究の比較を示され、約9年前と比較し心不全患者年齢の中央値が73歳から81歳と高齢化が顕著に進行していることも併せて示された。

このように心不全患者の高齢化が進んでいる現況では、以前に比し心疾患以外の併存疾患や加齢変化によるフレイルを伴っておられる方も多く、そのことも再入院を繰り返す誘因の一つであることとご指摘された。

よって高齢者心不全は急性増悪時の積極的医療だけでは対応困難であり、かかりつけ医などによる在宅医療、介護サービスの利用、疾患予防に対する行政の努力など、総合的な対応で可能な限り再入院を抑制する必要があるとのことであった。高齢者心不全患者の再入院抑制の一つの方策として漢方薬が有用かもしれないとのことであった。数ある漢方薬の中で、心不全診療に期待できるものとして「五苓散」をご提示頂いた。「五苓散」は近年、アクアポリン(AQP)を介した水調節機能があるとされており、腎集合管主細胞の血液側細胞膜にあるバソプレシンV2受容体を選択的に拮抗し、AQP2の誘導を阻害して水再吸収を選択的に抑制するトルバプタンとの併用は心不全治療に有用であろうとのことであった。現在、京都大学を中心に「うっ血性心不全(心性浮腫)患者における五苓散追加投与の有効性を検証する研究(GOREISAN-HF Trial)」が進行中で、今後、心不全に対する五苓散のエビデンスが得られることを強く期待する内容であった。

また、フレイルに対しても漢方薬も有用である可能性を示され、人参養栄湯や補中益気湯に解説頂いた。

令和3年3月26日に「2021年JCS/JHFSガイドライン フォーカスアップデート版 急性・慢性心不全診療」が発表され、2017年以降、HFrEF

に対し新たに保険適用となった HCN チャネル遮断薬イバブラジン、アンジオテンシン受容体ネプリライシン阻害薬 (ARNI) サクビトリル・バルサルタン、SGLT 阻害薬ダパグリフロジンにつき心不全治療アルゴリズムでの位置づけが明確化された。

また、これまで HFpEF に対してはランダム化比較試験によって有効性が確認された薬剤がなかったが、令和 3 年 7 月 6 日に **EMPEROR-Preserved** 試験の **top-line result** が公表され、SGLT 阻害薬エンパグリフロジンが初めて HFpEF に対し有効性を示した薬剤となった。

このように、心不全に対する新たなガイドライン、エビデンスが立て続けに報告される中で、五苓散の未来をお示しになれるなどの今回の北井先生のご講演はまたとない機会となり非常に有意義であった。

(文責 医療法人 福山会 福山医院 福山智基)